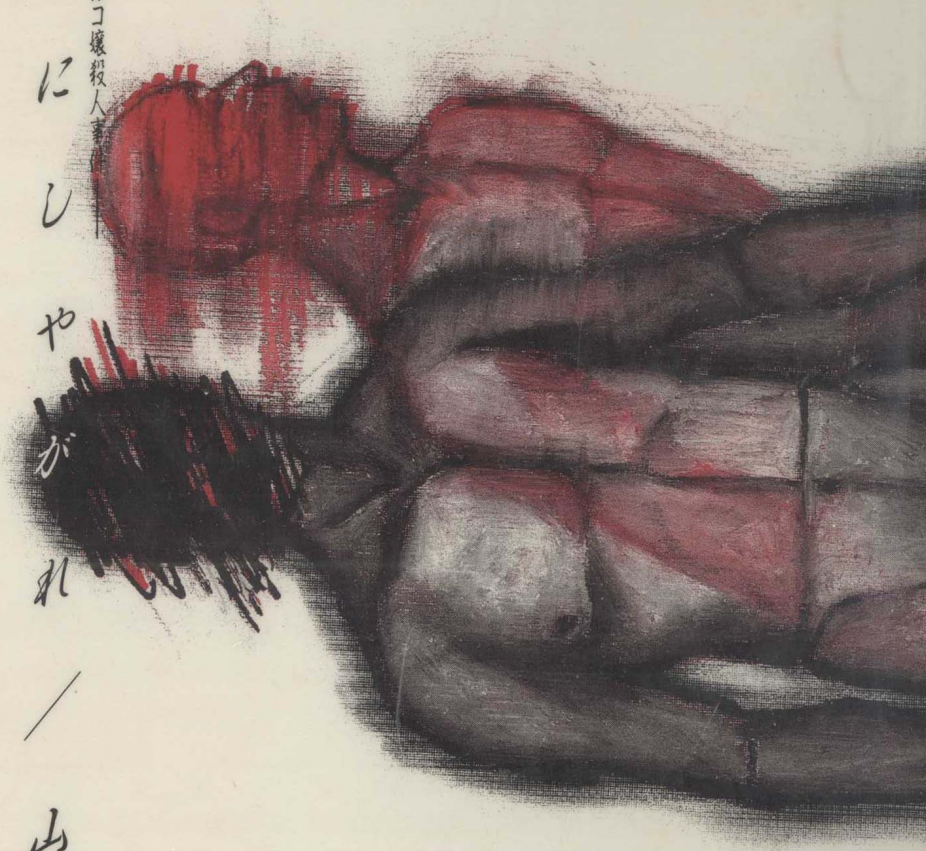
勝手にしやがれ／山崎哲

―克美茂トルコ嬢殺人事件―



著者略歴
一九四六年生
広島大文学部中退
劇団「つんぼさじき」を経て「転位・21」を結成
第26回岸田国士戯曲賞受賞
主要作品
「漂流家族」
「うお伝説」

勝手にしやがれ

定価九八〇円

一九八三年七月三〇日印刷
一九八三年八月一〇日発行

著者 © 山崎哲
発行者 高橋孝
印刷者 山岸真純
発行所 株式会社 白水社
東京都千田代区神田小川町三の二四
電話 営業部 〇三(二九)七八一一
編集部 〇三(二九)七八二一
振替 東京 九一三二二八
郵便番号 一〇一

三秀舎印刷・黒岩製本

(分) 0093 (製) 54270 (出) 6911

山崎　哲

勝手にしやがれ

——克美茂トルコ嬢殺人事件

勝手にしやがれ——克美茂トルコ嬢殺人事件——

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

人物

アベル
カイン
裕子
輪幸
支配人
踊子1
踊子2
踊子3
幸江
その他

札幌に向かうジェット旅客機のキャビン。
銀色のドームの下には、右二つ、左三つのシートが設えてあり、正面、通路奥の扉はトイレに通じている。
コンクリートと鉄のいがみあう金属音にも似た滑走――、離陸音。暗闇のなかで、白色光線に晒されたジュラルミンの胴体がキラリキラリ、明滅する。
奥の扉が開かれると、アベルがいる。眼のなかを血でいっぱいにして、喉に逃れられぬ想いのカケラをつっかえさせたアベルが――。
爆音はいつしか、克美茂のヒット曲〈霧の中のジョニー〉となる――。

霧が立ちこめ冷たい雨が降ると
どこか遠くの彼方から
ぼくの耳にはあの娘の声が聴こえてくるんだ
(JONY REMEMBER ME)
ぼくは決して忘れはしない
死んだあの娘が最後のことばで
(JONY REMEMBER ME)

忘れるものかぼくが生きてるかぎり
(JONY REMEMBER ME)

アベル、歌いながら、ゆっくりと正面シートに歩みでる。
音楽が不意に空廻りしはじめ、コーラスの一節――、「JONY REMEMBER ME」が執拗に流れだす。

アベル　――。(胸苦しくなる)

音楽が退いていき、再びジェット機の爆音。

アベル　――！　(咏えきれなくなって、ハンカチに烈しく吐瀉する)

スチュワーデスの機内放送が流れてくる――、
「アテンション・プリーズ、アテンション・プリーズ。皆さま、本日は全日空羽田発札幌行き第×便をご利用頂きまして、誠にありがとうございます。当機はただ

いま、水平飛行に切り換えられました。ベルトをお外しのうえ、どうかごゆっくりおくつろぎください。なお、札幌への到着時刻は午後×時××分の予定でございます。では、全日空の快適な空の旅を心ゆくまでご満喫くださいませ。」

乗客たちの緊張の糸が解れる。アベルの背中をさする男がある——。

アベル　ありがとう、兄さん——。

油小路　もういいのかい、アベル？

アベル　ええ、兄さん——。

油小路　ほんとうにいいのかい、アベル？

アベル　——。

油小路　吐きたかったら、うんと吐いたっていいんだよ、アベル。おまえの吐いたもので、ここが神田川のべちょべちょになったからって、俺はかぐや姫にだって文句いわせないんだから。

アベル　ありがとう、兄さん。

油小路　いいんだよ、アベル。それに、ホラ、あいつらだって——、銀いろの翼に乗りなれたフリをしてる貧乏人どもだってね、神田川の毒気に当てられちまったらこう気づく

さ。

アベル　なんて――？

油小路　ヒコーキとは空翔ぶ下水管だったのか！

アベル　ヒコーキって下水管なんですか？

油小路　はい、空翔ぶ便器です。

アベル　――。

油小路　そうだろう、アベル。考えてもごらん。こんな――、見せかけのだね、合金の翼でエデンの園まで翔んでいけると思うかい。

アベル　考えだにしなかった――。

油小路　そうだよね、アベル。たとい、離陸寸前にかました俺のオナラがだよ。いまごろになって、羽田の受付嬢の鼻毛をムズムズおちょくってるとしてもだよ。たかがマッハ幾らかの速度でだね、失なわれたエデンはおろか、カナンの大地までも翔べやしない。たとい、銀河系の果てまで喘息おしてよじ上ろうとだね、あのバベルの塔の土踏まずさえ舐めることはキャン・ノットなんだ。ね、アベル？　こいつはいつだって、血の詰った地上に翼をへばりつかせるために、ただ舞い下りるしかないんだ。だから――、こいつは臭い。大便の臭いがこびりついている。こいつは滓なんだよ。夢じゃない。ただ、

夢みられた夢の残り滓にすぎないんだ。ね、アベル？　おい、俺をなめるなよ、空翔ぶ肥溜めのキャン・ノット。なんとか言ってみろ、キャン・ノット。キャイン、キャイン――！（と鳴いて、銀のドームに頭突きを喰らわす。額に血が滲む）俺はなにか間違ってるだろうか？　（またやろうとする）

支配人　き、君っ、むちゃは止めなさい、むちゃ苦茶は！　君はあれかね、私らになにか怨みでもあんのかね、あん？

油小路　行きずりの他人にですね、私がどうしてそんな高級な感情を抱かねばならないんでしょう。

踊子1　あたし、お金貰ってもあんたなんかに抱かれるの、嫌よ、ねえ。

踊子2　あたし、お金欲しい。

油小路　あなたのお妾さん？

支配人　失礼な！　会社の大切な商品だよ。

油小路　それで？

支配人　ヒコーキがだね、バランスを失なって海に堕落――、いや、墜落でもしたらどうするんだね。

油小路　私がこんなことをするから？　（とドームに頭突き）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

支配人　やめたまえ！（シートにへばりついた）
油小路　うわっ！（と声で脅かす）
支配人　ひっ――。
踊子たち　がんばって、マネージャー。
支配人　お、おい。君は知らんだろうがね、品川区西大井三丁目七番地七号にはだね、私の家族がいるんだぞお。女房のジュンコにだね、受験戦争をおっ始めたシンイチ、一昨日小児喘息の太鼓判をおされちまったチドリ、ひと月に三六二回もおしめを世話してやらねばならんチカコ。いやあ、まだいる！　ジュリーがブラウン管で歌うたび、廊下をはしゃぎまわって総入れ歯を天井の桁にかみつかせる八一歳の婆アと、ぶくぶく膨らむしか能ないタブチ！
踊子1　わかるわあ、マネージャーの気持ち。
踊子2　同情よ、マネージャー。
支配人　やさしいな、文化的根なし草は。
油小路　もし、タブチさん。
支配人　だれが――！
油小路　タブチさんでしょう？

踊子1　バカねえ、拾ってきた犬の名前よ。
踊子2　タブチなんかトレードに出したら、マネージャー。
踊子1　歌舞伎町の屋台ラーメン屋にね。
踊子2　人気がでたりして、ブチラーメン。
支配人　うるさい、並豚！　タブチ君だってきっとイタイケなんだ。そうだろう？　タブチ君が草原のキリギリスみたいにやせ細ばえてみろ、誰が振りかえる!?　誰が漫画にする!?　肥満がとりえだと思うからこそ、タブチ君だってだな、トレーニングをさぼって残飯を漁りわたってるんだ。どうだい？　ありもせぬ虹のカケラをわし掴むような、こんな愛の眼差しでもってだね、君は私たちの家族生活を面倒みてくれるってのか、あん？
油小路　あなたの最終学歴は？
支配人　いま、そんな話をしてる場合か。
油小路　念のためね。
支配人　あ、君はねんごろになりたいんだな、私と？
油小路　学歴いかんですが――。
支配人　大卒です。

油小路　私、怒るよ。
踊子たち　怒ってんのは私たちよ、ねえ。
油小路　こんなことでだね、ヒコーキが海に落っこちると思うの？
支配人　――、心理的にはね。
油小路　はい？
支配人　だから――、心理的に、落っこちそうな気分になる。ね？
踊子たち　――。（白けてシートに身を沈める）
油小路　大卒のおっちゃん。
支配人　はい？
油小路　あんたのケチな心理の傾きぐあいでだよ、ジェット機が竹トンボに早替りしちまったら、二千年の伝統を誇る文明の立つ瀬がないんじゃない？
支配人　それもそうね。
油小路　こんなことで――、（と機体を頭突き）ブンメイの結晶が馬の糞になるんだったらだよ、シンイチ君は、なんで尊い青春を犠牲にしてまで馬の糞を拾いに行かねばならんわけ？　チドリちゃんだって一生お嫁にも行けず、ゼエゼエ病いもちのノラ犬みたいに、大地でへたばる運命を待つばかりじゃないか！

支配人　なんで私に怒るの？
油小路　おしめが臭うんだよ、生活のおしめが！
支配人　大学を卒業したら、おしめなんか穿きません。
油小路　これは？
支配人　ネクタイです。
油小路　これがネクタイならば、鼻糞だってカフス釦だ！
支配人　（気づき）あっ――、ジュンコのやつ、また間違いやがった。
油小路　はい、あなたのカフス釦。（と鼻糞を男の頬に）
支配人　このヤロウっ――！
油小路　まだなにか？
支配人　いえ、その――、ジュンコ、お休みなさい。（シートに身を沈めた）
油小路　――、気分はどう？　アベル。
アベル　――。（瞼を閉じている）
油小路　眠ってるのかい、アベル？
アベル　いいえ――。
油小路　思いきって神田川にしてみる？　どうせ、おしめだって浮かんでることだしね。

その白い喉のなか、この指でくねくねしてやろうか。

アベル　やさしく？

油小路　カインはいつもやさしかったろう、アベル。

アベル　そうでした——。けど、ほんとうにもういいんです。

油小路　信じていいんだね。

アベル　ええ——。（眼をあける）兄さん、血がでてる——。

油小路　いいんだよ、ちっとも痛かないんだから。

アベル　痛くないんですか。

油小路　いまはね。

アベル　さっきまでは痛かった？

油小路　ぜんぜん、痛くない。

アベル　いつ痛むんです。

油小路　そうね、札幌に着く頃かしら。もっとも、おまえ次第だよ、アベル。おまえの吐き気が治まらないかぎり、鉄の斧が俺の額にくいこもうとも、俺の痛みは戻らない——。それ、ちょうだい。（とハンカチを指す）

アベル　こんなもの、どうするんです。

油小路　トイレに流してこようと思って。
アベル　自分でやりますよ。
油小路　いいんだよ、アベル。おまえは、さくらクレパスで塗ったくったようなこの青空に、おたまじゃくしを泳がせながら新曲の練習でもしていなさい。
アベル　食べるんじゃないでしょうね、トイレの中で。
油小路　玉葱をむいたような、あの女どものお尻を？
アベル　これ――。
油小路　なあに？
アベル　ぼくのゲロ。
油小路　食べないよお。
アベル　ほんとうに？
油小路　食べてほしい？
アベル　いいえ。
油小路　約束する、指切りする、針千本のむ。
アベル　さっきもそう言いましたね。
油小路　どこで？

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com